

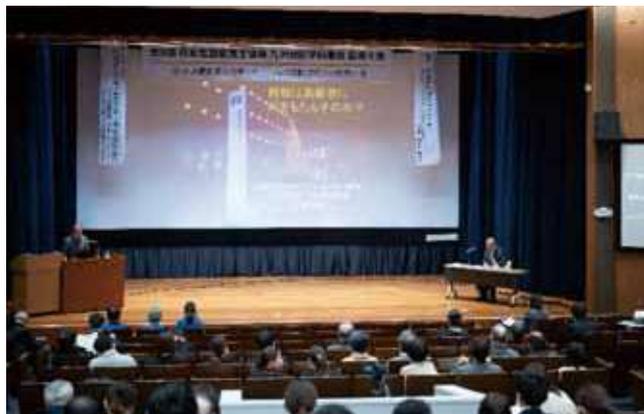
第9回日本言語聴覚士協会 九州地区学術集会 長崎大会 開催報告

会長 田上 由貴子
実行委員長 草場 謙至

去る令和2年1月18日、19日に第9回日本言語聴覚士協会九州地区学術集會長崎大会を開催し、2日間で県内外から329名の参加がありました。この学術集会は30数年前に九州各県の諸先輩方が九州言語臨床研究会を立ち上げられ冠を変えながら続いてきました。この大会名に変わって2巡目となる今回は、前回の運営スタッフは後方支援に回り、次世代を担っていく若手スタッフを中心となり企画運営を行いました。

そこで、あらためて小児から成人まで多岐にわたる言語聴覚療法の基本を見つめなおし、次世代へのバトンを繋いでいこうと、大会テーマに「言語聴覚療法のすべて～つなぐ役割・つながる未来～」を掲げ、基調講演では、長崎リハビリテーション病院理事長の栗原正紀先生に「地域包括ケア時代における言語聴覚士への期待」という内容で、専門職としてこれからのあるべき姿勢を熱くお話しいただきました。教育講演2題、実践セミナー、他ランチョンセミナー2題、演題数は60演題（口述、ポスター）、専門講座も2講座開催と盛りだくさんの内容となりました。

また市民公開講座を2部構成で開催し、「難聴は高齢者に何をもちたらすか？」と題し長崎みなとメディカルセンターの高橋晴雄先生のご講演。そして「地域包括ケアシステムを支える当事者、家族を知る」と題し、病気をしても体が不自由になっても自分らしくいたいと活動されている当事者団体や、ALS、発達障害の家族会、吃音のサポー



市民公開講座

ターを含めた自助グループの方々に日ごろの活動状況などを紹介していただきました。参加者の皆さんからは、地域で尽力なさっている方々の生の声が聞け、とても印象に残ったという声もいただきました。

8年前とは違いメールなどでタイムリーに情報のやり取りができるようになった反面、それに伴う確認の難しさや新たな課題にも直面した大会となりました。

途中トラブルもあり、皆様にご迷惑をおかけしたところもありましたが、無事に2日間の日程を終えた達成感とともに、また次につながる貴重な経験をさせていただきました。今大会にご参加、ご協力いただきました皆様に心より感謝申し上げます。



(上)開始前の打ち合わせの様子(下)ポスター会場



運営スタッフ一同